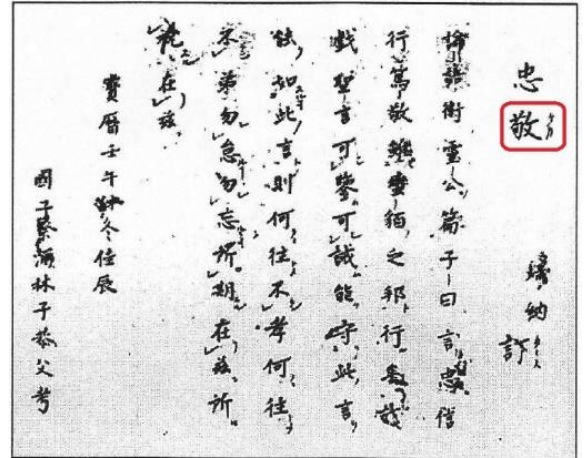


展示国宝一覧

忠敬の面影 忠敬が身に付けたものや肖像画から、その面影を探る

① 忠敬名乗書(写) 国宝：文書・記録類 347

宝暦12年、伊能家の婿養子となるにあたって、家格を釣り合わせるため多古の平山季忠を仮親とするとともに、林大学頭鳳谷に形式的に入門させ、「忠敬」という実名を与えられた。名乗書の写真、翻刻、出典等については『会報』77号で前田幸子氏が詳しく紹介している。また、会報第14号の伊能陽子氏、46号の佐久間達夫氏の紹介記事がある。なお、右の忠敬名乗書の副本に「敬」の字に「タカ」の振仮名があることで、「忠敬」の読み方が「タダタカ」と確認できる。



忠敬名乗書 副本 千葉県香取市 伊能忠敬記念館所蔵

② 伊能忠敬像 国宝：器具類 59

この「伊能忠敬像」の作者は、御先手組同心から天文方下役として測量隊に加わった青木勝次郎である。青木の名前は、第5次測量の後の文化4年3月14日の忠敬の「江戸日記」に初めて登場する。忠敬62歳の頃である。坂部とともに泊まり込みで天体観測に取り組んだ上で、第6次測量に参加することになる。



千葉県香取市 伊能忠敬記念館所蔵

③④ ^{かみしも} 袴 と ^{はかま} 袴 伊能忠敬記念館蔵

肖像画の袴・袴に似ているということで展示されている。

⑤ 刀 伊能忠敬記念館蔵

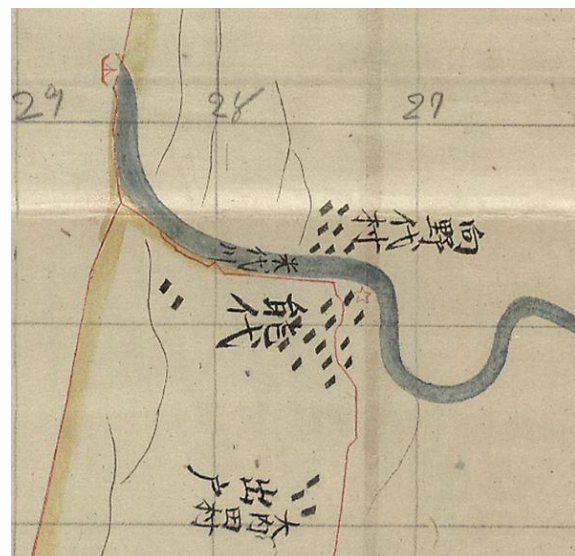
展示品解説によると「伝島津侯拝領刀」とのことである。また筭や縁は金工師の第二代石黒政常の作としている。第二代石黒政常が父の跡を継いだのは文政12年であり、忠敬どころか孫の忠誨の死後のことになる。あくまでも「伝」の世界である。

⑥ 大図（秋田県：能代～深浦）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第二十五〈自能代／至関〉」

国宝：地図・絵図類 番号42 縮尺1/36,000

前回の展示に引続き第3次羽越測量の成果の続きが展示されている。第3次測量の辞令「陸奥三馬屋以西東海測量申渡」の追而書きには、8月に日食測量があるので心得るようにとあり、能代に享和2年7月23日から1泊して8月1日の日食観測にのぞんだ。しかし、この日は朝から曇り、日食が始まる頃には雲がますます深くなって太陽は見え、復円する前になってようやく「濛影」が見えたので「大遠鏡、中遠鏡」で測定した。7月26日の測量日記には「夢に堀田侯に謁す」と記されており珍しい。測量隊は矢立峠から弘前へと羽州街道を測量し、青森から海浜測量となった。この大図は8月24日に関村を出立してから、29日に能代に戻るまでの測量成果である。



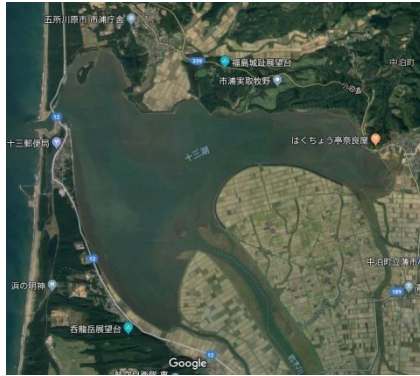
アメリカ大図60号

⑦ 大図（秋田県・深浦～青森県・十三湖）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第二十六〈自関ノ至小泊〉」

国宝：地図・絵図類 番号43 縮尺1/36,000

この大図は8月21日に小泊を出立して23日に関村に到着するまでの測量成果である。8月20日の測量日記に、十三瀉周縁の測量は、村々通行を問うたところ、瀉より遥に遠い村でないとは通行困難とのことで取り止めたとある。大図の赤い測線は十三瀉の途中までで終わっている。航空写真と比べると岩木川による土砂の堆積がよく描かれている。



アメリカ大図38号

娘への手紙

忠敬の残した手紙や測量日記から、忠敬の人柄を探る

⑧ 書状（元気はあるが歯が1本）

国宝：書状類 番号125

『伊能忠敬書状（千葉縣史料近世編文化史料一）』P175～176

第8次測量の途中、島原城下から文化9年11月8日付で発出した書状である。『測量日記』の11月10日に「此日江戸書状渡」とある。この書状では、年が明ければ69歳、元気はあるが、歯は1本になり時々痛み、奈良漬も食べられないと嘆いている。年老いには骨折りで朝暮心労も察して欲しいが、妙薫の心配・世話で衣服、炬燵、手炙までも差し支えがなく大いに宜しいと妙薫に感謝の言葉を記している。

また、展示番号⑬の書状では「ドン物」と罵倒されていた保木敬蔵も「算盤も少しは良くなり」、嘉平治、善蔵ともに「小鈍だが正直に勤めている」と、1年前よりは評価が向上している。

⑨ 書状（合理主義：薩摩藩の贈物が気に入らないから取替えて）

国宝：書状類 番号39

『伊能忠敬書状（千葉縣史料近世編文化史料一）』P58～59

文化10年2月3日付で忠敬が平戸城下から出した書状である。薩摩から白さや三反、芭蕉布三反などが届いたという妙薫からの書状に対して、芭蕉布は品がよくなかったので金を足すから袴地と取替えるように頼んだのに、約束を違えたというのである。文化8年10月2日の書状（『伊能忠敬書状』86）でも、間宮林蔵が三治郎と鉄之助に上南部織りの反物を土産に持参したが子供が着るのには早いので、売却して当座の反物に取替えては如何かと書き送っている。無駄を嫌う合理的な経済感覚が窺われる。

⑩ 測量日記（本音では九州一とも云い難し）

国宝：文書・記録類 番号83

第7次測量（九州第1次測量）の途中の文化7年7月15日の測量日記を展示している。昨年3月28日から展示されていた同一部分である。場所は鹿児島県の坊津岬である。測量日記では「此の坊津岬は九州一の絶景と云い伝う。…眺望するに九州一とも云い難し。」と忠敬の本音が述べられている。なお、右の図は、国会図書館デジタルコレクションから、広重の「六十余州名所図会 薩摩 坊ノ浦双剣石」である。



アメリカ大図210号



⑪ 書状（飯米帳でチェックすると）

国宝：書状類 番号 4 4 『伊能忠敬書状（千葉縣史料近世編文化史料一）』 P67～68

忠敬の八丁堀亀島町の地図御用所では、多くの内弟子や天文方の下役たちが地図作製に携わっており、その食事やおやつも忠敬が負担していた。2月16日付けのこの書状によると、飯炊きが清助にかわってから飯米の消費が増えたので、忠敬は飯米帳で確認してみた。すると1日当り二升以上多く消費するようになっていた。地図御用所の中には井戸がなく、清助が外の井戸で米研ぎをすることを理由に米を屋敷外へ持出し、横流ししていたのである。清助が勤めていた50日程で米1石が盗まれたことになるかと嘆いている。文化14年2月14日の江戸日記に清助が出奔したという記事があるので、この書状は文化14年と確定できる。

⑫ 書状（墨のすり方一つで甥の性根がわかる）

国宝：書状類 番号 8 0 『伊能忠敬書状（千葉縣史料近世編文化史料一）』 P107

神保庄作（正作）は忠敬の兄の神保貞詮の次男に当り、文化4年頃から忠敬の身边に仕えていたようである。忠敬の供侍として第6次測量に参加した。庄作に硯と墨を貸して写しものをさせたところ、墨が□のようになってしまった。またすり直したところ今度は△にしてしまったというのである。忠敬は「ちょっとしたことにも心を尽くさないからだ」「墨はそれでも良いかも知れないが、身上向きにかかわるような仕事になおざりでは宜しくない」「ノホンの生まれつき」と評している。

⑬ 書状（内弟子も奉公人もドン物ばかり）

国宝：書状類 番号 1 2 0 『伊能忠敬書状（千葉縣史料近世編文化史料一）』 P163～165

第8次測量に出立して間もなく掛川宿から妙薫に出した手紙である。第8次測量に召連れた内弟子や奉公人の人物評がおもしろい。棹取の甚七はドン物で引縄も測器の据え付けも呑込めないが九州に着くまでには一人で出来るようにしたい。侍の加藤嘉平次もドン物で何かと間抜けで困るが悪気はないので慣れれば良くなるだろう。内弟子の保木敬蔵も同様にドン物だがこれはかねて覚悟していたという。保木は佐原村領主津田家の用人である渡辺清蔵の身内を引き受けたものである。

⑭ 書状（孫はかわいいが）

国宝：書状類 番号 5 2 『伊能忠敬書状（千葉縣史料近世編文化史料一）』 P76～77

第8次測量の帰路に京都から妙薫とリテに宛てた文化11年3月2日付の書状である。文末には、孫の三治郎の書初めがよく出来きて「大慶」、「過食宜しからず、酒は決して飲ませ申さず」、江戸に帰着したら対顔を楽しみにしているとある。書状では孫には甘い普通の祖父のように見えるが、前田幸子氏が「会報」76号で紹介した小宮山楓軒の『懷宝日札』には、忠敬が厳しく三治郎を教育するので、人々は三次郎が早死にするのではないかと心配した。すると忠敬は「学ばないで長生きするより、学んで短命なほうがいいのだ」と言ったと記されている。

⑮ 書状（論語を引用して倅に説教）

国宝：書状類 番号 1 5 1 『伊能忠敬書状（千葉縣史料近世編文化史料一）』 P216～219

国のため郷党のためになる人は、誰もが誉める人ではない。誰からも誉められる人は柔和で毒にも薬にもならない。憎まれないようにするのは簡単だが何の益にもならない。出府した盛右衛門（景敬）に対して論語の子路24を引用しながら説教している。

⑯ 測量日記（至時からの激励・・足下の一身、天下暦学の盛衰に係る）

国宝：文書・記録類 番号 7 4

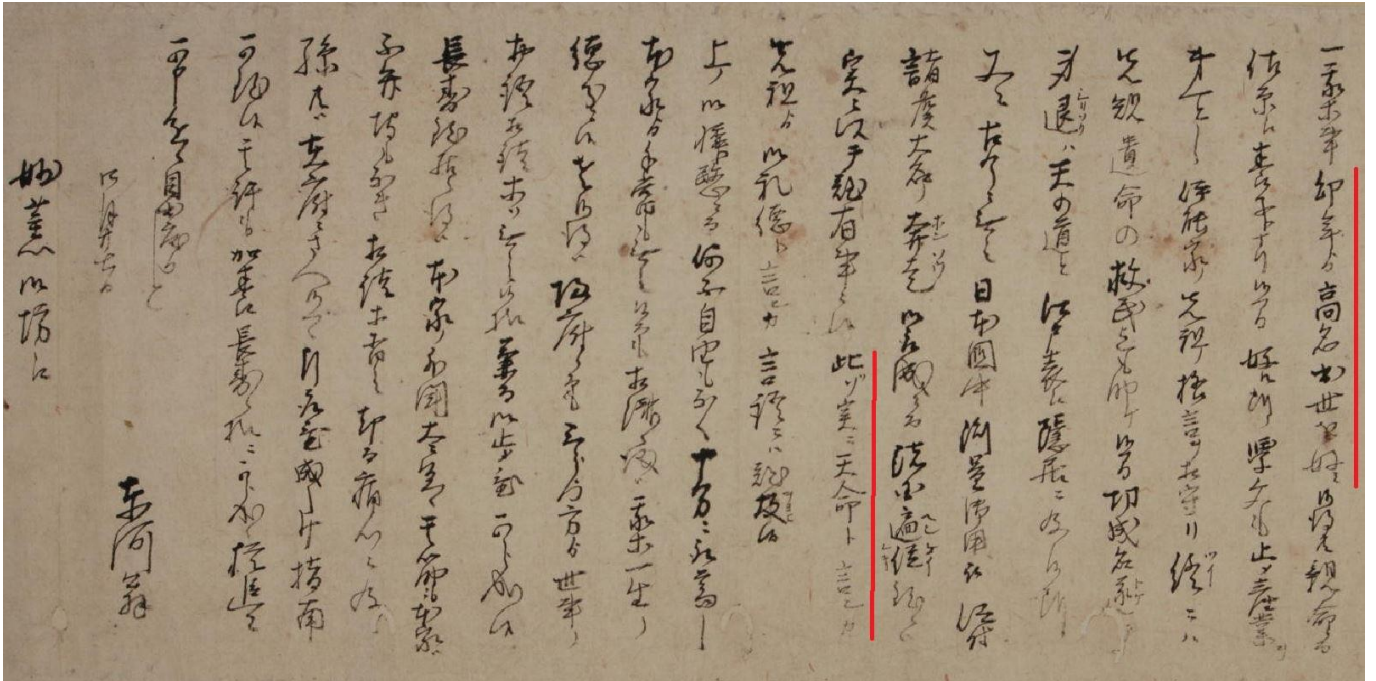
享和3年9月22日に六日市（南魚沼市）で受取った糸魚川事件についての公的戒告状に添えられた内書の部分である。「天下の暦学者各眼を拭ひ、足下の地図成就の期を日を算え待候事にて、後世永々英名を御残し候事、此時に候て、又是を以、世上暦家の机上腐臭の故態を破し、精密の一家堅く相建候も、今之時にて、実に足下の一身、天下暦学の盛衰に係ると可申候」と至時は忠敬を鼓舞している。

⑰ 書状（幼年より高名出世を好み）

国宝：書状類 番号8 『伊能忠敬書状（千葉縣史料近世編文化史料一）』 P12～14

文化10年4月27日付で対馬大浦から妙薫宛てた書状で、高橋景保役所焼失についての感想に続く、忠敬が自分の人生を回顧した部分である。傍線部が有名な「幼年より高名出世を好み」という述懐である。親の命で佐原で養子となり、「好ル所ノ学文も止メ、産業ヲ第一」とし救民もおこない、「功成名遂テ、身退ハ天の道」と第一の人生を振り返っている。さらに、江戸で隠居したが、古今にこれ無き日本國中測量御用を仰せ付けられ、諸侯大名の協力のもと諸国を測量したことは、実に以て有難きことで「此ゾ実ニ天命ト言ンカ」と述べている。

会報33号、会報54号に解説があるので参考にされたい。



千葉県香取市 伊能忠敬記念館所蔵